

論文

先史アンデス形成期における神殿をめぐる人々の活動と戦略
—ペルー北部ワンカバンバ川流域のセトルメント・パターンと地域間交流から—

山本 睦

要旨

本稿では、ペルー北部ワンカバンバ川流域における神殿の建設や維持に関わる人々の活動と戦略を、セトルメント・パターンと地域間交流をもとに論じる。

ワンカバンバ川流域では、ポマワカ期（紀元前 1200-800 年）に、複数の神殿遺跡が築かれて遺跡数が増加し、急激な社会変化が生じた。こうしたセトルメントの構築に際し、水利や耕作地との近接関係は、まず重視される要因である。また、流域社会においては、流域から周辺地域へ抜ける地域間ルート、ひいては地域間交流が極めて重要な意味を有した。そのため、地域間ルートの重要性が増す時期、すなわちペルー北部で地域間交流が活発化する時期と、流域内で神殿が巨大化・複雑化する時期が一致している。こうした状況のなかで、流域へと至る四方からの地域間ルートが交わる要衝に位置するインガタンボ神殿が、流域の社会的統合の中心となっていった。このことから、社会的統合の中心的役割を果たした大規模神殿にとって、地域間ルートとの関係は、神殿建設時に重視されるのみならず、神殿および神殿を支える社会が大規模化していくための要因ともなっていたと考えられる。

地域間ルートの存在は、神殿の立地や建設および維持活動の選択・決定を左右し、その後の社会展開において人々の活動や戦略に影響をおよぼした。たとえば、神殿を支える人々、とくにリーダーは、他地域から物資や情報を用いて集団内の差異化を図るため、あるいは周辺地域に展開する他の神殿との関係を構築するために、積極的に地域間交流を行うようになった。つまり、人々が作りあげた神殿、ルート、セトルメントは人々の活動や戦略の結果であると同時に、一度構築されてしまうと人々の活動や戦略そのものを規定し、影響をおよぼす存在ともなっていたと考えられる。

キーワード

アンデス、神殿、セトルメント・パターン、地域間ルート、地域間交流

1. 本稿の目的

本稿の目的は、アンデス文明形成期（紀元前 3000-50 年：表 1）のペルー北部ワンカバンバ川流域（図 1）社会において、神殿をめぐる人々の活動と戦略を論じることである。その際、本稿では、セトルメント・パターンと地域間交流に注目する。一つめのセトルメント・パターンとは、特定地域における遺跡の分布、機能と生態系の関係性である。そして本稿では、セトルメント・パターンとその通時的変化を、景観研究の視点を用いて考察する。ここでいう景観とは、人間と空間や場所の関係の総体である（Staller 2008: 1-2; Tilley 1996: 162）。また、景観は、自然環境と人工環境から構成される周りの環境を、人間が主観的な色眼鏡を通してみることで多角的に立ち現われてくる（河合 2013）。そこで、人間と環境相互の多様なあり方を掘り下げて捉えることで、社会の行為主体である人々の活動や戦略を論じることが本論のねらいである。

二つめの地域間交流とは、多様な環境を利用する日常生活圏を超えた人や物資の移動のことを指す。アンデスでは、地域間交流が文明形成において重要な役割を果たしたとされる（加藤・井口 1998: 220-224; Burger 1992: 220-227）。これは、各地の社会が、流域や盆地などの閉鎖的な地理的区分内で展開したのではなく、外部社会との交流を常に有していたことを意味する。ワンカバンバ川流域社会における人々の活動と戦略においても、流域外部社会との関係が重要な役割を果たしたと考えられるため、本稿ではこれを論に組み込む。

本稿で用いるのは主に考古資料であり、なかでもワンカバンバ川流域における神殿や居住施設などの遺跡分布データが中心となる。データと議論の核になる神殿は、公共建造物や祭祀建築ともよばれる。そして、神殿は、単なる居住施設ではなく、公共的・記念碑的・宗教的側面をもち、社会的統合の中心かつ交流の場であって、アンデス文明形成期社会の展開に大きな役割を果たしたとされる（e.g., 加藤・関編 1998; Burger 1992）。

そのため、次の 3 点に着目し、それらの相関について考察する。1) 神殿を中心とした流域内の諸遺跡がどのように築かれ、利用されたのか、2) そうした場における諸活動が社会成員の戦略のなかでいかに行われたのか、3) 逆にセトルメントが人々の活動や戦略をどのように規定し、社会にいかなる影響を与えたのか。

なお、本稿では社会成員のなかでも、集団内で一定の役割を持つ特定の個人や集団であるリーダー（関 2006: 64）に、とくに着目する。なぜならば、彼らの役割は流動的であるが、彼らの動きこそが、社会の維持や変化に際して重要であったと、筆者が考えるためである。

以下では、まず、先行研究を概観し、本稿の方法と視点、意義、および形成期研究における位置づけを明確にする。次に、ワンカバンバ川流域の遺跡分布データに、インガタンボ遺跡の発掘データを加味しながら、同流域の遺跡分布とその特徴、遺跡間の関係性を明らかにする。そして最後に、地域固有の歴史性を重視しつつ、セトルメント・パターンを環境、および地域間ルートとの関連をふまえて検討し、流域社会で神殿の建設や維持に関わる人々の活動と戦略を論じていく。

2. アンデス形成期における神殿

本節では、先行研究を概観し、アンデス形成期における神殿の位置づけを明確にする。

アンデス形成期は、文明の胎動期であり、この時期の社会は複雑社会、あるいは前国家社会とされる。そして、形成期に神殿などの大規模建造物の建設がはじまることから、それらを中心に、これまで調査や研究が進展してきた。また、研究の焦点は、人類学や考古学の理論的動向の変化をうけ、神殿の形態的特徴や規模だけではなく、神殿を築き、利用した人々の活動へと推移してきた (e.g., 加藤・関編 1998; Moore 1996)。

そうして研究が進むにつれ、アンデス形成期神殿の特徴として、古い時期の建築を時には破壊して埋め、その上に新しい建造物を造るという建設活動が繰り返されることが、各地で明らかとなった。これをふまえて提示されたのが、神殿の建設活動自体を社会変化の主要因とする「神殿更新モデル」である (加藤・関編 1998; 大貫 1989: 193)。このモデルでは、安定した農耕により余剰生産が増大する前に神殿が現れること、そして同じ場所で建設活動が繰り返されることに着目する。さらに、神殿更新を実施するためには、それに見合うだけの生産力や労働力、労働組織、交流による物資や情報などの入手が必要となることから、繰り返される神殿の更新と社会変化の相互関連が文明展開の主要因として説明される。つまり、繰り返される神殿の更新において、社会は常に変化の契機をはらんでいとみなされるのである。

その一方、各地の調査事例が増加するなかで、神殿更新のあり方自体にも多様性が認められるようになった。古い神殿を覆うように同様の規模や形態の新しい神殿が築かれる事例や (Izumi and Terada 1972)、更新ごとに古い神殿よりもより複雑で大規模な神殿が築かれる事例 (e.g., Onuki (ed.) 1995) などがその代表である。また、近年では、神殿更新の特性や社会的意味が地域や時期で異なった可能性も指摘されている。たとえば、神殿更新は比較的短期間のうちに繰り返し行われた共同体の年中行事のようなものであったという考えや (Burger 2009: 20-31; Burger and Burger 1991: 292-293)、単一地点での拡張を目的とせず、漸次的に活動の中心を移していく「移転型神殿更新」というモデルも提示されている (鶴見 2008a: 246)。

さらに、神殿は人々を社会的に位置づけるイデオロギーの普及装置でもある。ここでいうイデオロギーとは、社会秩序を示すコードであり (De Marrais et al. 1996; Earle 1997; 関 2006)、信仰体系や超自然的な情報へのアクセス、特定の人物や集団の思考や行動、儀礼、物質文化と深く結びついている。そして、イデオロギーは、神殿で行われる建設活動や儀礼を通じて、もしくは儀礼で使用される象徴財によって具現化され、社会へと浸透する。これは、イデオロギーの物質化や可視化とよばれ、集団内の社会的不平等に正統性をもたせるほか (De Marrais et al. 1996; Earle 1997)、社会的紐帯を強化し (Ikehara and Shibata 2005; Vega-Centeno 2005)、参加集団内の関係性を明確化する。なお、神殿建設には立地の選択や建築プランの設計が不可欠であるが、神殿の形態や配置には神殿で行われる儀礼やその指導者と参加者との区分、参加人数が深く関わる。

また、儀礼で使用される奢侈品や威信財の製作や獲得という、物資へのアクセスをめぐる

って、集団内の社会的差異が助長される。そして、神殿をめぐる活動は、特定の地域内で完結せず、遠隔地起源の物資や情報、技術の入手において、地域間交流が必要となる。こうして、物資の輸送やルートの維持・管理および他集団との関係が、神殿での活動を継続的に行うために重要となるのである。そのため、地域間交流は、当該社会の経済やイデオロギーと深く関連し、集団内の上下関係を象徴的に顕在化、固定化し、政治的ネットワークを形成するのに役立つようになる（関 2006: 30）。

以上のことから、流域社会で実際に社会を動かした人々の活動や戦略を論じる際に、社会的統合かつ交流の場である神殿を対象とすることが最適なものは明らかである。以下では、セトルメント・パターンを中心に、社会成員の主体的実践を考察していく。

3. セトルメント・パターンと景観、および地域間交流

本節では、論考の鍵となるセトルメント・パターン研究を概観する。その際、同研究と景観研究、および地域間交流をめぐる議論の関係を明らかにし、本稿の方法と視点、意義を明確にする。

多様な環境を有するアンデスにおける人間と環境との関係については、以前より議論が交わされてきた（e.g., Steward and Faron 1959）。そのなかでも、特定の遺構や遺跡ではなく、地域的枠組みにおいて、両者の関係を考察する考古学的研究の代表例が、セトルメント・パターン研究である。

セトルメント・パターン研究は、地理学と文化生態学の影響を受けて展開した（Anschuetz et al. 2001; Kowalewski 2008）。アンデスにおける最初の事例は、ペルー北部海岸のビルー川流域の調査であり、それは文化生態学の影響をより強く受けたものであった（Willey 1953）。1980年代になると、各地の地域的多様性や、国家形成など社会変化の過程への関心が高まった（Billman 1999: 3-4; Burger 1985: 272; Haas 1987: 2-4）。そして、遺跡の空間的地理的位置関係や遺跡間の機能と生態系との関係、および多様な環境利用といった諸問題が、河川や盆地単位で通時的に研究された（e.g., Billman 1996; Pozorski and Pozorski 1987; Wilson 1988）。

その一方で、1980年代以降には、ポストモダニズムの影響を受けて、特定の考古学的状況（遺構や遺物の分布など）を特定の間行動に単純に結びつけ、社会変化の過程を普遍的にモデル化することに批判が生じた。その結果、各地域社会の歴史性に着目し、社会変化における個人の役割に主眼をおく研究が顕著になってきた（e.g., Hodder 1982; Shanks and Tilley 1987; Yoffee 1993）。こうした研究では、社会変化を論じる際に、画一的なモデルを提示するのではなく、歴史的多様性を追うことが重視される。そのため、この理論的転換をうけて、セトルメント・パターン研究にも変化が生じた。そして、盆地などの地理区分を超えて汎地域的枠組みで考古学的現象を捉えようとする研究や（Balkansky 2006）、セトルメントと社会の政治的中心の変化とが連動しないというオルタナティブな社会変化モデルを示す研究（McIntosh 1999）などが現れた。また、ローカル社会の主体性を重視し、その社会成員間の関係性や、ローカル社会と地域社会全体との関係性を追求する研究

(Bandy 2005; Albarracin-Jordan 1996) も、同じ流れに位置づけられる。

こうした各地の歴史性を重視した動きのなかで、人間と環境との相互作用は、人類学、考古学ともに、90年代から景観研究の枠組みにおいて盛んに論じられるようになってきた。

河合 (2013) によれば、景観をめぐる人類学的研究には、生産論と構築論という二通りの流れがある。前者は景観がいかに政治経済的に生産されるかについて、後者は現実生活中を営む地域住民の主体性を重視し、いかに景観が構築されていくのかという点について考察する。また、つくりあげられた景観が、どのように人々の実践に影響するのか、それらの相互関連も重要な研究対象となっている。この根底には、認知や身体化といった問題への関心があるが、それは景観研究がポストモダニズムの影響を受け、文化表象への対応に取り組みながら展開してきたためである。

これに対して考古学では、景観という概念や用法がきちんと整理されてきたとは言い難い (Kowalewski 2008: 253)。しかし、人類学と同様に、物質文化を築いた当時の人々の行動や経験、認知に迫ろうとする視座を基本に研究が進められてきた (e.g., Anschuetz et al. 2001; Ashmore and Knapp 1999)。空間や場所を、社会的行為のなかに埋め込まれた存在として捉えると (Tilley 1991: 10)、結果としてそこには様々な形で人間の行為や思考が介在することになる。この視点にたてば、建造物そのものだけでなく、建設活動や建造物で実施された儀礼、および複数の建造物から構成されるセトルメントは、それらとそれらを取りまく環境に対する人々の認識や活動、戦略が集積した場となる。したがって、上記の場で活動が繰り返されることで、当該社会の文化的記憶や宗教的知識も再認識、再解釈され、社会のヒエラルキーは再強化される (Staller 2008; Trigger 1990)。こうした前提をふまえた研究として、アンデスでは、建造物の視覚効果や空間構造に着目した権力論や (Moore 1996, 2005)、環境の自然的・人為的変化と権力の生成といった社会政治的変化の研究 (Contreras 2007, 2010) がある。一方で、景観研究において重要なテーマである認知や身体化については、興味深い研究が行われているものの (松本・中園・時津 2003)、人々が遺した痕跡という考古学データの特性もあり、人類学と同様のアプローチで分析・考察するのは困難である。

ここまでみてきたように、セトルメント・パターン研究と景観研究との連続性や関連性は明らかである (Anschuetz et al. 2001: 168-172; Ashmore and Knapp 1999: 1; Kowalewski 2008: 252)。そして、既述の理論的背景をふまえ、景観を切り口に考古学データを捉えることで、空間における権力性や、ある場所がどう構築されたのかという問題を、歴史性を重視しながら理解するための指針がもたらされる。言いかえれば、セトルメント・パターン研究に景観研究の視点を導入し、人間と環境との相互作用を、データの背景にある行為主体者の存在や実践をふまえて動的に捉えることに、その重要性と新規性がある。そして、人々がいかに環境を意味づけするのか、どのように環境を捉え、形作り、利用するのか、逆に人間の思考や行動がつくりあげられた環境がいかに規定されるのか、といった点を通時的に考察することが可能となる。

そこで本稿では、セトルメント・パターンの通時的变化を明らかにし、流域社会成員の活動や戦略、およびその動態を分析する。ある人々が景観をつくりあげる行為を、空間や

場所を介して社会関係を伝達、認識、経験、再生産させるものと捉えるとき、セトルメント・パターンは、単なる分布や位置関係ではなく、人々の活動や戦略が反映された、あるいはそれらに影響を与えた景観であると考えられるためである。これによって、社会が複雑化し、文明や国家に至る過程が多様であることを実証データから示す一つの試みとして、ワンカバンバ川流域社会の動態を提示できるであろう。

また、既述のようにアンデスの各社会は、常に外部社会に対して開かれてきた。そして、先行研究において、周辺地域や遠隔地との地域間交流は、宗教、経済、政治の諸側面において社会変化の重要な要因の一つとされてきた (e.g., Burger 1992; 加藤・関編 1998)。現在では、調査の蓄積によって地域的多様性が明らかになっているため、地域間交流を考察する際に、各地の社会的状況に即した分析や論考を行うことは不可欠である。さらに、地域的に多様性があることから筆者は、地域間関係は、交流の場でもある各地の神殿を一樣に結ぶものではなく、神殿を支える集団がそれぞれの社会的背景に応じて選択的かつ主体的に決定するものと考ええる。そのため、特定地域社会の動態を考察する際に、地域内に特化した議論だけでは不十分であり、外部社会との関係をふまえる必要がある。そこで本稿では、地域固有の歴史性を重視しながら、同時に地域間交流に着目して、ワンカバンバ川流域のセトルメントを考察する。こうして、人々の活動や戦略を多角的に論じることにより、一地域の事例研究にとどまらずに、アンデス研究へ貢献できると考えられる。

4. ワンカバンバ川流域における遺跡踏査

本節では、ワンカバンバ川流域の概要を述べたあと、遺跡踏査の目的と方法を明らかにして、遺跡の分布状況の特徴について記述する。

4-1. ワンカバンバ川流域の概要

ワンカバンバ川流域は、ペルーとエクアドルとの国境付近にある。そこはアンデス山脈分水嶺東側の山地と熱帯低地の狭間であり、海岸部と山地や熱帯低地、山地間を結ぶ地理上の要衝に位置し、自然の回廊のような役割を果たしている。同流域の特徴は、乾季においても豊富な流量とその多様な生態系である。谷底には、標高 800~1,000m のなだらかな土地が広がり、谷の両側には標高 3,000m 程度の山々がそびえている。さらに、ペルーとエクアドルの国境地帯は、交通の要衝かつ異なる諸社会が接触する交流の場であり、その仲介者的役割を果たした独自の社会が存在したと考えられている (e.g., Burger 1984, 1992: 99-103, 216-217; Guffroy 1989: 203; Hocquenghem 1991: 312-314)。

このように、研究上重要な地域とされているにもかかわらず、筆者らの調査以前には、ワンカバンバ川流域における考古学的研究は、ほぼ皆無であった。先行研究は、ペルー文化庁による遺跡地図¹(Ravines 1983)やインカ期の幹線と関連遺跡の調査(Espinosa 2002)に加えて、ペルー人学生による学位取得目的の調査(Malaver 2001)があるだけである。

¹ インガタンボ遺跡とイェルマ遺跡が、形成期以降のものとして登録されている。

4-2. ワンカバンバ川流域遺跡踏査

本稿の対象は、流域のなかでも西端をオチェンタイウノ、東端をリビントスという現代の集落とする範囲である。東西の端はいずれもワンカバンバ川と他の川とが交わって交通の分岐点となり、急激に谷幅が狭まるような場所で、自然の地理区分となっている²。また、踏査の際には、谷の底部だけでなく、両側にそびえる山の斜面や頂上までをひとまとまりとした。これは、植民地時代の例 (Murra 1985) や現代の地域住民の生活を考慮すると、先スペイン期においても生活空間として、谷底だけでなく、近隣の山々が利用された可能性があるためである。

踏査の目的は、第一に考古学的基礎データ (遺跡の分布や地表面採集による遺物) の収集、とくに遺跡分布と生態系との関係を把握することであった。また、遺跡分布、地形や環境、住民へのインタビューなどを総合して、隣接地域へ移動するための地域間ルートを解明し、地域間交流の様相を明らかにすることが、第二の目的であった。

踏査では、事前に地域住民へのインタビューを行い、S.A.N. (Servicio Aerofotográfico Nacional : ペルー国立航空写真事業) 刊行の航空写真を使って遺跡に関する情報を集め、対象範囲をくまなく歩いて遺跡を同定した。同定基準は、主として地表面に遺構と遺物が確認されることである。しかし、遺構が確認されない場合でも、丘陵の頂上部や斜面といった限定された空間内に土器資料が散見される際には、遺跡として同定した。踏査の際には、遺跡ごとの特徴や時間的位置づけを明らかにするために、地表面で徹底的な考古遺物の採集と建造物の記録を行った。遺跡の緯度、経度、標高については、GPS (Global Positioning System : 全地球測位システム) を用いて、ペルー国土地理院刊行の 1 / 100,000 の地図に記録した。また、登録遺跡の時期決定は、踏査時は周辺地域の先行研究と比較して行い、その後でインガタンボ遺跡の発掘調査資料をもとに再検討した。これらに加えて、地域間ルートの分析のために、現代の集落や旧道の位置を地図上に記録するとともに、住民へのインタビューを行い、ルートの妥当性と現在の使用状況の把握にも努めた。

4-3. 遺跡分布とその特徴

踏査の結果、調査以前から文化庁に登録済みの 2 遺跡を含む 128 遺跡を登録した (Yamamoto 2007; 山本 2012)。形成期に属するのは、そのうちの 62 遺跡で (図 2-5³)、その大半はポマワカ市周辺に集中している。また、62 遺跡全てがポマワカ期 (形成期中期) に属し、そのなかの 3 遺跡はインガタンボ期 (形成期後期) まで継続的に利用された。踏査では、形成期早期と形成期前期、形成期末期に属する遺跡は確認されていない。遺跡の大部分が、ワンカバンバ川やそれに注ぎ込む河川、ケブラーダ⁴ (*quebrada*) 近くの台地や丘陵上にあり、標高約 1,300m 以下に位置することが、分布の特徴である。

² 実際の踏査範囲の東端は、チプレという集落であったが、谷幅の広狭による生態学的区分から、本稿で示した分析範囲を一つの自然の地理区分とするほうが妥当と考えた。

³ 登録した遺跡は概ね西から東へ向かって番号がふられている。本稿では、形成期の遺跡のみを取り扱うため、以下の図や表では形成期以外に属する遺跡は扱わない。

⁴ 涸れ谷とも訳されるが、季節的に水が流れるものや、常に水をたたえているものもある。

5. 形成期遺跡の形態的分類と遺跡間の関係性

本節では、遺跡踏査時の地表面観察による建築データを用いて、各遺跡を形態的特徴から分類し、各遺跡の規模を考慮しながら、遺跡間の関係性を明らかにする。

5-1. 遺跡の形態的分類

踏査時に記録した建築データを用い、その特性を明らかにするため、形態的特徴をもとに各遺跡を分類した(表2)。分類では、神殿の形態研究(加藤 1993; Moore 1996)を参照し、建築の構成要素として「基壇」、「広場」、「テラス」、「部屋状構造物群」、「部屋状構造物」を設定した。次に、保存状況などから現状では上記の構成要素に含まれない建造物(壁)が存在するため、下位レベルの建築要素として「土留め壁」と「壁」という項目を設けた。さらに、踏査時において、建築が確認できずに土器片のみ登録した遺跡が数多くあることから、「土器のみ」というタイプも定めた。これらの「土留め壁」、「壁」、「土器のみ」の三つは、遺跡の形態が不明なため、表においては「その他」としてまとめている。また、カテゴリーとは別に、複数の構成要素が組み合わさった配置を呈する遺跡を「基壇・広場・テラス複合」と「基壇・テラス複合」とした。

以下、流域内で唯一発掘を実施したインガタンボ遺跡のデータと(山本 2012)、周辺地域の先行研究を考慮しながら、分類した各タイプの特徴について記述していく。

①「基壇」

基壇を有する遺跡で、10遺跡が該当する。基壇のみ確認できるのは1遺跡である。

②「テラス」

テラスを有する遺跡で、12遺跡が該当する。テラスのみ確認できるのは、3遺跡である。

上記2タイプの遺跡は、形成期神殿の指標とされる基壇やテラスといった建築特徴の存在や建造物の規模、配置、非居住的性格などから、神殿であったと推測される。また、基壇とテラスの複合配置「基壇・テラス複合」をとるものは9遺跡⁵あり、基壇と広場、テラスの複合配置「基壇・広場・テラス複合」を呈するのは1遺跡だけである。しかし、「基壇」や「テラス」とされた遺跡のなかには、今後、他の構成要素が確認されて、複数の構成要素が組み合わされた配置を呈する可能性があるものも存在する。これは、分布調査が表面観察のみに依拠しており、地表面を覆う植物の影響もあって、建造物の全形を認識することが困難なためである。なお、遺跡間の関係性や規模差などに関わる後の論考に備えて、表2では濃淡を用いて神殿遺跡(全13)を明確化した。

⁵ 唯一、発掘調査が行われたインガタンボでは、ワンカバンバ期に「基壇」、ポマワカ期に「基壇・テラス複合」、インガタンボ期には「基壇・広場・テラス複合」が存在したことが明らかとなっている。

③「部屋状構造物群」

様々な規模の部屋状構造物が複数確認できる遺跡である。発掘調査を実施しておらず、構造物間の関係性が明瞭でない場合が多いため、全体配置はとくに考慮していない。5遺跡が該当する。

④「部屋状構造物」

一つの部屋状構造物が確認できる遺跡である。18遺跡が該当する。今後の調査によっては、他の構造物が認められ、「部屋状構造物群」となる可能性もある。なお、インガタンボ遺跡では、非居住的性格を有した部屋状構造物が基壇上に配置されている。このように、部屋状構造物は神殿の一要素ともなる。

⑤「その他」

「土留め壁」・「壁」

基壇やテラス、部屋状構造物などは形成しないが、壁が地表面に確認できる遺跡である。8遺跡が該当する。

「土器のみ」

地表面で建造物を確認できず、土器の存在のみから登録した25遺跡がこれに該当する。

③～⑤の遺跡には神殿の建築特徴がみられず、建造物の規模や形態的特徴を含めて、①～②の遺跡と比較した際に大きな差異がみられる。これらは居住遺跡と想定される。

5-2. 建造物の形態と規模

本項では、建造物の形態と規模の関係について考察する。表2の右欄は、各遺跡規模を示したもので、地表面で視認できる建造物の範囲や土器の分布範囲から推定されている⁶。形成期遺跡の大半では、形成期以降の活動も認められるため、構造物の範囲が形成期以降に対応することも考えられる。しかし、インガタンボの発掘調査によると、形成期と形成期以降の構造物には明確な差がある。そこで、建材や建築技法、他地域の先行研究との比較を通じて、建造物の時期を判別し、この問題に対処した。

以上の点に留意しつつ、建造物の形態と規模の関係についてみてみよう。複合配置である「基壇・広場・テラス複合」と「基壇・テラス複合」は、建築の構成要素が組み合わされたものであるため、他のタイプよりも必然的に規模が大きくなる。実際、「基壇・広場・テラス複合」を有するインガタンボ遺跡は、その建築的複合性もあり、流域内で最大規模を誇る。これに続くのは、基本的には「基壇・テラス複合」であるが、単純に規模だけを比較した場合、「基壇・テラス複合」のほか、「部屋状構造物群」や「部屋状構造物」、もしくは「土器のみ」に属する遺跡が上位に位置づけられる場合がある。この理由は二つ考え

⁶ 現代の諸活動などによって遺跡の破壊が進んでいるような状況では、遺跡の規模が実際よりも極端に大きく、または小さく想定される可能性はある。

られる。一つは、現代の耕作や居住による攪乱などの影響で、土器の分布範囲が広がるためである（ロマ・デ・サポテパンパ、アルカパロッサ 3、パタコン 5、ラス・バルサス）。もう一つは、形成期と形成期以降に属する構築物が、広範囲に混在する場合である（アルカパロッサ 1、ラ・ワカ 2、サン・ホセ・デ・オブレーロ 2、ラ・ワカ 3、モジェ、ナランホ 3、サポテパンパ 1、イェルマ 5、アラビスカ 1、チンゲル、エル・アレナル 1）。なお、遺跡全体を貫く建築プランとして「部屋状構造物群」がとられた事例は、形成期のワンカバンバ川流域では確認されていない。

その一方で、遺跡規模を比較すると、複合配置を呈する遺跡と「基壇」や「テラス」といった構成要素のみを有する遺跡間では、基本的に前者の方が大規模である。しかし、「基壇・テラス複合」を呈するグアヤボ遺跡は小規模である。これは、遺跡が舗装道路によって壊されており、面積が実際よりも小さく算出されていることが原因であろう。

また、神殿と想定した 13 遺跡中の 11 遺跡では、ポマワカ期のみが確認された。このように、特定地域内に複数の神殿が近接して存在する要因としては、「移転型神殿更新」（鶴見 2008a）が考えられる。しかし、このモデルの根拠となる、特定地域内での神殿の密集状況や神殿間の建築軸の一致、または移転後に近接する神殿間相互の可視的な関係は、ワンカバンバ川流域では確認できない。たとえば、インガタンボとイェルマ 6、リモン・セコ 1、カニャニアッコ 3 といった大規模神殿の建築軸は、それぞれ異なる。そして、インガタンボの場合、視認できる神殿は、最も近接した神殿のエル・レホのみである。さらに、鶴見が調査したペケテペケ川流域アマカス平原の事例では、移転の要因としてワイコ（*Huayco*）と呼ばれる鉄砲水や土石流の影響が想定されているが、ワンカバンバ川流域の全神殿は、河川から一段高い台地や丘陵上に建設されているためワイコの影響は考えにくい。そして、現在の状況を鑑みても、神殿の建設場所は、川の氾濫時にも浸水しない。このことは、神殿建設に際して、あらかじめ水の影響を受けにくい場所が選定されたことを示唆する。このように、ワンカバンバ川流域の神殿の立地状況は、アマカス平原のそれとは大きく異なる。したがって、ポマワカ期に複数の神殿が認められるという現象は、移転の結果ではなく、全ての神殿が同時に建設され、活動していた結果であると推測される。

なお、流域内の遺跡の大半は「その他」に属している。詳細は不明であるが、これらは、いずれも単純なマウンドで、その規模も他のカテゴリーと比べて極めて小規模である。

5-3. 流域における遺跡間の関係

本項では、前項までの議論をもとに、ワンカバンバ川流域の遺跡間関係について論じる。基礎となるのは、遺跡踏査データであるが、発掘を行ったインガタンボ遺跡のデータ（山本 2012）も議論に組み込む。以下、インガタンボ遺跡の概要を述べた後で、ワンカバンバ期から順に論を進める。ここでは、各時期の遺跡数や遺跡規模、建築特徴による分類のバリエーションとその分布状況に注目する。

5-3-1. インガタンボ遺跡の概要

ワンカバンバ期に神殿建設がはじまる。土器の存在は認められず、他地域との交流を示

すデータは、ワンカバンバ期後半（形成期前期）に出土した一点の海水生種の貝だけである。

ポマワカ期になると、周期的な増改築である更新を伴いながら神殿の規模が増し、土器が利用されはじめる。建築や土器の特徴をみると、とくにペルー最北部海岸や北部熱帯低地との類似性が顕著である。ラクダ科動物やトウモロコシなどの出土開始とともに、海水生種の貝製品が大幅に増加して、周辺地域との地域間交流を示すデータが急増する。

インガタンボ期には、更新によって神殿の規模が最大となる。また、他地域との交流を示すデータも増加し、ラクダ科動物やトウモロコシ、海水生種の貝製品に加えて、ペルー南部山地産の黒曜石が出土するようになる。さらに、神殿内に黄金製品を伴う埋葬も現れる。なお、建築や土器の特徴からは、ペルー最北部海岸や北部熱帯低地だけでなく、北部海岸や北部山地との類似性が認められる。

5-3-2. ワンカバンバ期（形成期早期・前期：紀元前 2500-1200 年）

ワンカバンバ期の活動が明らかとなっているのは、インガタンボだけで、小規模な「基壇」が確認されており、流域内で唯一の神殿であったと考えられる。基壇の規模を考慮すると、神殿の面積が、インガタンボ期に同じ場所に築かれた基壇の半分にも満たないため、あくまで小集団の利用にとどまったと思われる。

5-3-3. ポマワカ期（形成期中期：紀元前 1200-800 年）

遺跡数が急増する。とくに、神殿の数や規模、バリエーションが多様化する。全ての神殿は、ポマワカ市周辺に集中し、ほぼ 4km 前後間隔⁷で位置している。しかし、地形や植生の影響もあって、相互に視認はできない。神殿の規模も多様である。インガタンボ、イェルマ 6、カニャリアッコ 3、リモン・セコ 1 は大規模であるが、それら以外の神殿では規模差はほとんどない。なお、大規模遺跡のなかでも、インガタンボとイェルマ 6 の規模は突出している。

次に、神殿と神殿を支えた人々が生活した居住域との関係について検討する。ポマワカ期以降のインガタンボでは、神殿内に特殊な部屋状構造物が確認される。しかし、仮にそれが住居であったとしても、その規模を考慮すると神殿における活動を支えた全ての人々が居住することは不可能である。アンデス形成期において、神殿と居住域の関係は明確ではない。数少ない調査例であるペルー北部ヘケテペケ川中流域のモンテ・グランデ

(Tellenbach 1986) とラス・ワカス (鶴見 2008a) では、神殿に近接して居住区が確認されている。ただし、これらの居住区は、その立地や仕上げなどから一般成員の住居ではなく、リーダーのためのものであったと考えられている。そして、鶴見は、神殿付近や同じ高度の段丘上にも居住施設が認められないことから、一般成員の居住域を耕作地に近い谷底と仮定して、神殿と居住域の分化について論じた (鶴見 2008a: 280)。インガタンボでは、神殿付近に居住区は確認されていない。また、③～⑤に分類された居住遺跡は、とく

⁷ 「基壇・テラス複合」を呈する遺跡間の最大距離は約 6.7km あるが、その中間には「基壇」や「テラス」を有する遺跡が存在している。

にイェルマ 6 遺跡とインガタンボ遺跡の間において、谷底に近い耕作地を利用できる場所に集中してみられる。これらのことから、神殿や神殿に近接して居住したのは極めて限られた人々だけであり、神殿と居住域という空間分化が生じつつあったことが示唆される。

5-3-4. インガタンボ期（形成期後期：紀元前 800-550 年）

流域の遺跡数は大幅に減少し、中規模・小規模神殿の多くが放棄される。活動が認められる神殿は、インガタンボとカニャリアッコ 3 だけであり、エル・アレナル 4 では部屋状構造物が確認されている。

すでにポマワカ期から傾向がみられたものの、インガタンボは規模において他を圧倒しており、それ以外で唯一の神殿であるカニャリアッコ 3 は 1/5 程度の規模しかない。つまり、流域内の神殿建設活動に関わる人的エネルギーが、インガタンボへ集中したと考えられる。また、インガタンボでは、更新による大規模化とともに、それまでは独立併存していた複数の基壇が広場を挟んで繋がり「基壇・広場・テラス複合」配置が形成される。これは、単なる労働投下量の増大だけではなく、建築の洗練と複雑化を示すものである。

次に、神殿と居住域の関係である。遺跡数の減少もあり、居住域と考えられる遺跡は、エル・アレナル 4 以外に確認されていない。しかし、インガタンボで神殿が極大化することから、更新に際してポマワカ期以上の労働力が投下されたと推測できる。そのため、居住遺跡は確認されなくとも、流域で人口が極端に減少したとは考えにくい。遺跡数減少の要因の一つには、遺跡の保存状態や現代の集落の存在があげられる。なぜならば、水利や農耕との関係において、インガタンボ期に好まれた土地が、現在においても居住地や耕作地として継続的に利用されていることは、十分に考えられるためである。また、ワンカバンバ川流域の土器編年の指標が主として精製土器であり、日用土器ではポマワカ期とインガタンボ期の連続性が強くみられる点には注意する必要がある。つまり、居住域で利用された土器が日用土器だけであった場合、ポマワカ期とインガタンボ期の時期差を識別することは困難である。仮に神殿と居住域といった空間分化が存在していたとすれば、耕作地へのアクセスに適した現代の諸集落と同様の場所が、居住域として選択されていたことが推測される。

5-3-5. 神殿の多様性とその背景

上述のように、流域社会では、ポマワカ期から神殿に多様性が認められるようになる。この要因としては、神殿更新回数や利用期間の差、または神殿間で建設活動や儀礼などにおける人的エネルギーの投下量差に基づく階層的関係が存在した可能性など、様々な背景が考えられる。インガタンボは、流域内で唯一ワンカバンバ期からの活動が認められる神殿である。また、流域内で三番目に大きなカニャリアッコ 3 遺跡もポマワカ期とインガタンボ期の利用がみられる。さらに、ポマワカ期だけに活動が認められる複数の神殿の規模は、ほぼ同じである。そのため、神殿の利用期間の差は、神殿の規模と関係しているようにもみえる。しかし、二番目の規模を誇るイェルマ 6 や、四番目に巨大であるリモン・セコ 1 では、ポマワカ期の活動しか確認されておらず、利用期間が短くとも大規模な神殿は

存在する。これに加えて、インガタンボの利用期間は他の神殿より長い、他の神殿との規模差は圧倒的である。そのため、神殿間の規模差には、利用期間の差以外の要因も関与していることが示唆される。それでは、神殿の規模差は何を表しているのだろうか。以下では、建設活動における労働投下量の差を中心に、この背景について検討する。

ポマワカ期のインガタンボでは、A 基壇と B 基壇を核に、二つの「基壇・テラス複合」配置が隣接して建設された。そのため、個々の基壇を独立した神殿としてみた場合、総面積は A 基壇と B 基壇が広場を介して組み合わせさせたインガタンボ期の半分以上となる。仮にポマワカ期の面積が、インガタンボ期の 1/2 と考えても、ワンカバンバ川流域で二番目に大規模であるイェルマ 6 の約 2 倍である。つまり、遺跡の表面積と形態的複雑性を考慮すると、インガタンボが、ポマワカ期のワンカバンバ川流域内で最も労働投下量の多い神殿であることは明白である。そして、イェルマ 6、それ以外の「基壇・テラス複合」配置を呈する神殿、次に「基壇」あるいは「テラス」を有する神殿が続く。つまり、ポマワカ期の流域内では「基壇・テラス複合」の神殿が中心的役割を果たしたと考えられる。ただし、インガタンボとイェルマ 6 のように、同様の複合配置をもつ遺跡間でも明確な差異が存在することから、他の神殿よりも集中的に労働投下される神殿が現れた可能性はある。

その一方で、ポマワカ期には、複数の神殿がほぼ等間隔に隣接して建設され、流域全体を統合するような単一の集団は存在しないため、神殿を核とした集団が複数存在していたと考えられる。しかし、それらのなかでもインガタンボは、神殿を支える集団の規模が大きく、より多くの労働力を有していた。他の神殿とは異なり、遺跡内に複数の基壇が同時に建設されることから、インガタンボへの労働投下量の大きさは明らかである。このことは、インガタンボが、ワンカバンバ川流域における社会的統合に際して、より中心的な役割を果たしていた神殿であったことを示唆している。これに対して、インガタンボ期には遺跡数が減少し、流域内の神殿建設活動に関わる人的エネルギーは、インガタンボへと収斂した。そして、神殿の極大化、複雑化と同時に、インガタンボを核として、流域内を統合するような社会が現れたことが推測される。

ワンカバンバ川流域でインガタンボにみられた、少数の神殿が大規模化するという動きは、ペルー北部のクントゥル・ワシやパコパンパでも報告されている(加藤・関編 1998; 大貫・加藤・関編 2010)。インガタンボ期(形成期後期)は、汎アンデス的に地域間交流が活発化した時期とされるが(Burger 1992)、インガタンボ遺跡の調査結果によると、それよりも早いポマワカ期(形成期中期)から周辺地域との地域間交流を示すデータが急増する(山本 2012)。つまり、神殿の形態や配置、その場で行われた建設活動や儀礼には神殿や地域ごとに差異があるが、インガタンボと周辺地域の諸神殿は、ポマワカ期からすでに地域間交流によって関連していたのである。そして、交流に伴い、神殿における諸活動に必要な物資やイデオロギーと関わる情報などがやり取りされたと考えられる。そのため、ワンカバンバ川流域とペルー北部地域では、インガタンボ期に社会政治的变化がほぼ同時に生じた。ただし、各神殿社会が、それぞれの戦略や社会的背景に応じて独自に活動を行ったため、各社会では連動しながらも、固有の展開がみられるのである。

6. セトルメント・パターンと環境

本節では、隣接地域へ抜ける地域間ルートに関する情報を整理し、それを考古データとあわせることで形成期のルートを特定する。これは、次節で流域における神殿の多様性の背景、とくに特定神殿が他よりも大規模化する要因を、環境との関連から論じる礎となる。

6-1. セトルメントと環境

流域の遺跡の大半は、ワンカバンバ川やそこに注ぎ込む支流やケブラーダ近くに位置している。こうした立地には、ワンカバンバ川流域の東に位置する北部熱帯低地のバグアとの共通性が認められる。これは、調査者のシャディが指摘したように (Shady 1973: 91, 1974: 582)、農耕や川漁など人々の生活において水が重要視された結果であると考えられる。また、ワンカバンバ川の両側にそびえる山の斜面は、現在では主に耕作地として利用されている。先述したように、遺跡の大半は標高 1,300m までの場所に集中しており、山の斜面と谷底を効率的に利用できる位置にある。そのため、形成期においても農耕に適したそれらの土地が、耕作地として利用されてきたことが想定される。これを支持するように、遺跡分布状況を見ると、遺跡の多くは流域内でも谷幅が広く、耕作地に適した谷底の面積が広いポマワカ市やプカラ市周辺に密集している。なかでも、分布がより集中するのは、ポマワカ市の周囲である。その一方で、ポマワカ市よりも河谷底部の耕作地面積が広大なプカラ市周辺には、形成期のセトルメントがほとんどみられないだけでなく、神殿は皆無である。したがって、ワンカバンバ川流域社会における神殿建設に際しては、水利と農耕以外の要因が重視されていたことが推測される。本稿で焦点をあてるのは、まさにこの点である。ここで、ワンカバンバ川流域の神殿の立地に注目してみると、全ての神殿が、ワンカバンバ川と支流やケブラーダとの合流点に位置している。一般にアンデスでは、複雑で高低差の激しい地形のため、山の尾根や河川流域が地域間ルートとして利用されることが多い。そして、ワンカバンバ川流域では、現代においても山を越えた隣接地域への徒歩移動の際に、そうした小路が使用されているのである。

6-2. セトルメントと地域間ルート

前項で示唆されたセトルメントと地域間ルートとの関係を考察するため、遺跡踏査の結果や、地形と河川および現代の利用状況から、移動可能な地点を特定して、地域間ルートを想定する。そして、想定されたルートの上に形成期の遺跡分布を重ねることで、形成期の地域間ルート⁸を特定していく。

この際、現在のルートも考慮するが、ルートはそれを建設した社会の政治的・経済的要因を反映するため (Topic and Topic 1983)、現代の事例を形成期にそのまま適用することはできない。ただし、現代でも徒歩移動で利用される道の多くは、河川や尾根沿いに位置しており、形成期においても使用されていた可能性はある。また、特定の目的地への移動

⁸ インカ道のように石造りの舗装がされているものだけでなく、踏み固められただけの小径 (path) も含む (Trombold 1990)。

に際して、目的や状況に応じて複数のルートが存在することもありうる。

ルート研究において重要なのは、①どの時期に、②どれが主要ルートで、③どのような交流が行われ、それが各地の社会の展開にいかに関連したかを明らかにすることである。つまり、想定されるルートと、そこに連なる社会との間に通時的な相互関係をみだし、整合性のある説明を与えることが、ルート研究の目的であるといえる(鶴見 2008b)。これらを通じてはじめて、地域間交流の実態とその社会的役割に迫ることができるであろう。

6-2-1. 北方面ルート

流域から北進するルートは、六つ想定される。図 2-5 には、遺跡分布とルートの位置関係も示されており、図中の赤線が想定ルートで、各ルートには方向と番号が付されている。なお、図中の「その他の道路」とは、隣接地域への徒歩移動の際に使用される小路やそれを利用してつくられた道で、車の通行が可能なものもある。

北へ向かう第一(以下、北①とする)ルートは、流域から北西へ進み、最北海岸のピウラへ達する。このルートはインカ道と同じ経路をとる。北②、北③ルートは、流域から北進したあとで、東の熱帯低地、あるいは北のエクアドルとの国境地帯へと進むものである。北④、北⑤、北⑥ルートは、流域から北進した後で北②、北③ルートと合流する。

次に、想定ルートに形成期のセトルメント、とくに神殿の分布を重ねてみると、北①～北③ルートの周囲に分布が集中している。そのため、これらのルートが、形成期の北方面主要ルートであったと考えられる。インガタンボ出土資料の分析によれば、ポマワカ期とインガタンボ期を通じて、北方面との交流は重視された(山本 2012)。なお、現在ではほとんど利用されていないが、上記のルート以外にも、ケブラーダや小路を利用して北方へ抜けるルートが存在した可能性はある。たとえば、「基壇・テラス複合」を有するグアヤボヤリモン・セコ 1 は、そうした地点に位置している。しかし、これらのルートは、北進するとすぐに既述の第一ルートに組み込まれるため、あくまで補助的な流域への出入口であったと考えられる。

6-2-2. 南方面ルート

流域から南進するルートは、四つ想定される。

南①ルートは、流域から南西に進み、北部海岸のチクラヨに達する。南②ルートは、流域から南進した後で、山間部で東西に分岐する。西に進んだ場合、南①ルートと合流して北部海岸へ、東の場合は山地へと進む。南③ルートは、流域から南進して山地(カハマルカ方面)へと向かうものである。このルートは、インカ道と同じ経路をとり、北①ルートと一連のものである。南④ルートは、流域の東側の山地を南進する。

南③と南④ルートがあるプカラ市周辺では、形成期の遺跡はほとんど確認されないため、流域から南進する主要ルートは、南①と南②ルートであったと考えられる。インガタンボ出土資料の分析によれば、南方面との交流は、ポマワカ期にも存在したが、とくにインガタンボ期になって重要視された(山本 2012)。なお、補足的ルートが、「基壇・テラス複合」配置を呈するカニャニアッコ 3 の地点にあるが、急峻な崖を登る必要があるため、現在で

は利用されていない。

6-2-3. 東西方面ルート

流域から東西方面へ抜ける東西①ルートとして想定されるのは、ワンカバンバ川の川筋である。これは最も高低差が少なく、インカ道の経路からもその存在が伺える。インカ道や大規模神殿は、南岸に位置しているため、全ての時代を通じて南岸が主要ルートであったと考えられる。また、記述の南北方面ルートには、流域から抜けた後で東西移動の際に利用されるものもある。

ここで、流域内のセトルメントを重ねてみると、流域内の移動に際しては主として川筋が用いられたと考えられる。また、流域から隣接地域への移動に関しては、南北ルートを利用しながら、その後で東西方面へ向かった可能性が示唆される。なぜならば、遺跡踏査範囲よりも西側（オチェンタイウノよりも西）、および東側（リビントスよりも東）では、これまでに形成期の遺跡が確認されていないためである。

7. 結論：ワンカバンバ川流域における神殿をめぐる人々の活動と戦略

これまでの分析と論考を総合し、ワンカバンバ川流域におけるセトルメント・パターンの通時的変化を論じる。とくに、そうしたセトルメントがいかに築かれたのか、なぜその場所が選択されて神殿が建設、維持されたのか、そして人々をとりまく、あるいはつくりあげられた環境が、流域社会の人々の活動や戦略にどのように作用したのかを、考察していく。より具体的には、流域内の神殿の多様性の背景、とくに特定神殿が他よりも大規模化する要因について、形成期の地域間ルートとセトルメントとの関係に着目し、論じる。

7-1. ワンカバンバ川流域におけるセトルメント・パターンの通時的変化

7-1-1. ワンカバンバ期前半（形成期早期：紀元前 2500-1800 年）

遺跡踏査では確認されていないが⁹、インガタンボでは小基壇が建設された。そして、神殿は、更新ごとにその規模を増すものの、建設に際して多くの労働力は必要とならなかった。また、規模や形態からみると、一度に大人数を収容できないため、神殿は小集団の人々によって支えられていたと考えられる。

7-1-2. ワンカバンバ期後半（形成期前期：紀元前 1800-1200 年）

インガタンボの小基壇が唯一の事例である。いまだ先土器期であるが、南に位置するチョターノ川流域では、すでに土器を有する社会が存在した（Kaulicke 1975）。両者間は徒歩で数日の距離であり、現代でも往来が認められる。それにも関わらず、両者には土器利用の有無といった明確な差異がある。また、インガタンボでは地域間交流を示すデータは極めて少なく、海水生種の貝が少量出土しているのみである。そのため、流域社会はペルー北部の地域間交流網から外れた地域であったと考えられる（山本 2012; Yamamoto

⁹ この地域では、石器など土器以外の考古遺物の編年は確立されていない。

2013)。この結果、ワンカバンバ川流域では、地域間交流の重要性が低く、他とは異なる社会の展開がみられた。なお、神殿の建設活動や儀礼からは、諸活動を取り仕切るリーダーの存在が示唆されるが、それは物質文化には表れておらず、ワンカバンバ期を通じて、神殿をめぐる活動は協同性にもとづくものであったと考えられる。

7-1-3. ポマワカ期 (形成期中期：紀元前 1200-800 年)

遺跡数、とくに神殿数の増加から、急激な社会変化が生じたことが想定される。セトルメントの決定、とくに神殿の建設に際しては、水へのアクセスと水害のリスクが重視された。また、耕作地との距離にも注意が払われたが、隣接地域との地域間交流の効率性、つまりはルートへのアクセスがとくに重要であった。そのため、神殿は耕作地面積が最大ではないものの、隣接地域へ抜ける地域間ルート沿いに位置している。さらに、インガタンボでは、海水生種の貝の出土が顕著となり、それとともに荷駄獣であるラクダ科動物がみられるようになる。こうして流域社会は、ペルー北部の地域間交流網に組み込まれ、要衝となったのである。そして、流域社会の人々は、神殿をめぐる諸活動を円滑に実施し、他地域の神殿との良好な関係を築いていくために、自らの置かれた状況を上手く利用しながら積極的かつ主体的に地域間交流を行い、交流網を構築していったと考えられる (山本 2012; Yamamoto 2013)。

その一方で、神殿の形態的特徴と規模からは、インガタンボやイェルマ 6 のように、流域の社会的統合に際して、より中心的な役割を果たした神殿の存在が示唆される。ただし、複数の神殿が流域内に併存することから、流域全体を統合するような集団はなく、各神殿を核に複数の集団が共存していたと考えられる。また、神殿更新のたびに大規模化し、分化する空間構造を鑑みると、建設活動や執り行われる儀礼におけるリーダーと参加者といった、社会的差異が表出しはじめたと考えられる (山本 2012)。つまり、神殿更新は、集団内の関係性を再認識、もしくは再解釈し、建設活動や儀礼に関わる物資や情報を管理、維持、蓄積するための機会・手段であった。そのため、リーダーによって戦略的かつ継続的に実施されたのである。しかし、階層化を示す具体的証拠や他地域からの搬入品が少ないことは、リーダーの権力の脆弱性や社会規模の小ささを反映すると考えられる。これらのことから、神殿をめぐる諸活動は、基本的に社会成員の協同性を基礎として行われたと推測される。

こうした神殿の分布に対して、居住域は神殿の周囲に分布しており、そこに特定のパターンはない。ただし、大規模神殿の周囲には、より多くの居住域が密集してみられる傾向はある。居住域の数や集中状況は、神殿で行われる諸活動に参加した人々の数や、建設に関わる労働力に対応すると考えられる。また、居住域は、谷底へのアクセスが容易な標高の低い場所に分布が集中しており、神殿と居住域との分化が進んで、社会成員の大半が耕作地付近で生活するようになったことが示唆される。

7-1-4. インガタンボ期 (形成期後期：紀元前 800-550 年)

遺跡数が激減し、ポマワカ期から社会的統合の中心的役割を備えていたインガタンボだ

けが、神殿を大規模化・複雑化させる。ペルー北部山地では、神殿をめぐる活動が特定の神殿へ収斂することが指摘されているが (e.g., 加藤 2010)、ワンカバンバ川流域でも同様の現象が生じた可能性がある。つまり、インガタンボを中心として流域内を統合するような社会が出現したことが示唆されるのである。これは、流域内に存在したもう一つの神殿であるカニャリアッコ 3 の規模が、インガタンボと比べると極めて小さいことや、この時期に新たに建設された神殿が存在しないことから支持される。

また、神殿は更新ごとに巨大化し、空間分化がさらに進行することで、リーダーとその他の成員という差異が顕在化していった (山本 2012)。そしてその際、遠隔地からもたらされた奢侈品の獲得と管理は、リーダーの権威を示し、象徴するものとなったであろう。さらに、神殿内には建設活動や儀礼に関わる重要な人物の埋葬と推測される、多量の副葬品を伴う特殊な埋葬が現れる。これは、集団内の社会的差異が拡大して、リーダーの権力が強まったこと、もしくは社会規模が大きくなるなかで、集団内の差異化を図り、権威の正統性を社会の他の成員に理解させようとするリーダーの存在を示唆する。

これらのことから、神殿更新は、協同性を下地に集団の社会的紐帯を強めるものから、リーダーによってつくられた社会的秩序や社会的差異を集団の成員に認識させ、不平等を覆い隠すとともに、その権威を正統化する契機や手段へと変化したと考えられる。そして、物質文化に表出されたイデオロギーは、更新や儀礼が繰り返されることで、次第に固定化されていったのである。

こうした神殿活動の特性の時期的変化は、諸活動を支える集団やそのリーダーの戦略、および神殿の社会的位置づけが変化した結果であると考えられる。たとえば、ペルー北部山地のワカロマ (関・坂井 1998) やペルー中央海岸におけるカルダル (Burger and Salazar 1991) では、形成期前期や形成期中期に、神殿の建設活動や儀礼が強力な政治的リーダーなしに、共同体の共同労働として実施されたと考えられている。その一方で、形成期中期になると、ペルー北部海岸のワカ・デ・ロス・レイエスやワカ・ルシーア、ワカロマなどにおいて、神殿の空間構造や建設活動の規模から集団内の差異が次第に明確化していったことが推測される (Pozorski Thomas 1980: 109; 関・坂井 1998: 157-158; Shimada et al. 1982: 139)。ただし、このような集団内部の社会的差異が、物質文化に明確に表れるようになるのは、続く形成期後期になって金製品を伴う特殊な埋葬が出現してからである。これは、インガタンボだけではなく、北部山地のパコパンパやクントゥル・ワシでも報告される現象である (加藤・関編 1998; 大貫・加藤・関編 2010)。さらに、形成期後期では、地域間交流が活発化して、広範な地域で技術革新や階層化を含む社会変化が同時期的に生じた (Burger 1988, 1992, 1993, 2008)。そして、神殿で執り行われる儀礼と同様に、地域間交流を通じて得られた奢侈品の入手と製作が、リーダーの権力基盤となったとされる (関 2010)。以上のように、他地域の神殿と比較した際に明らかとなるワンカバンバ川流域、とくにインガタンボの特徴は、大きく三つある。それは、一つの遺跡で長期間にわたって神殿更新が繰り返し行われたこと、神殿の建設や維持に際して地域間交流の存在がとくに重要視されてきたこと、そして両者の関連の深さである。

7-2. セトルメントと地域間交流

セトルメントの構築に際し、地域間ルート、ひいては地域間交流が重要な意味を持つことは既述のとおりである。しかし、それは全ての神殿で等しく重要だったのだろうか。この問題について、地域間ルートと神殿の方向軸の関係性から考えてみたい。

形成期には、流域から隣接地域へ抜けるルートのうちの複数（北に3本、南に2本、東西には南北ルート）が利用されたと考えられる。全ての神殿が上記のルート沿いに位置し、とくに最大規模を誇るインガタンボは、全方位に抜ける主要ルートが交差する要衝にある。また、大規模神殿を有するインガタンボやイェルマ6の建築軸は、谷底ではなく、隣接地域との地域間ルートへと向かって開いている。そして、インガタンボではワンカバンバ期から海岸部の社会との接触がみられる。それに対して、大規模神殿以外の遺跡では、谷底からのアクセスを重視するように建築軸が設定されている。

このことは、大規模神殿では、神殿の建設当初から流域内外からのアクセスが、それら以外の神殿では流域内からのアクセスだけが重視されたことを示唆する。それに加えて、インガタンボは、流域内でも谷が開け、谷底部だけではなく、南側にそびえる山の斜面や頂上部から南に広がる、比較的なだらかな土地を最も効果的に利用できる場所にある。また、ポマワカ期に流域内で神殿数が増加し、インガタンボが大規模化すると同時に、ラクダ科動物がみられるようになることから、神殿とルート、あるいは地域間交流との関連が推測される。ルートの選択には、当該社会の社会的、経済的、政治的、宗教的要因、あるいはルートで結ばれた周辺地域社会との関係性が大きく作用することは明白である。その一方で、実際の移動の可否や効率は環境に大きく作用され、制約される。この意味において、ルートは人間と環境との相互作用の結晶である。

さらに、アンデスでは形成期中期以降に地域間交流が活発化したことが盛んに指摘されるが（e.g., Burger 1992）、インガタンボはまさに地域間交流における地政学的重要地に位置している。そのため、地域間交流が活性化するなかで、ワンカバンバ川流域に至る全ての地域間ルートにアクセス可能なインガタンボが、流域内のルート、すなわち地域間交流を独占した。そしてこの結果として、流域の社会的統合の中心となっていったと考えられる。したがって、インガタンボに代表される労働投下量の多い神殿では、ルートの重要性が増して地域間交流が活発化する時期と、神殿が巨大化・複雑化する時期が一致する。神殿を支える人々、とくにリーダーは、神殿における諸活動を円滑に実施していくため、または他地域からの物資や情報の獲得を通じて、集団内の差異化を図り、周辺地域に展開する神殿との関係を構築するために、積極的に地域間交流を行ったものと考えられる。こうして地域間交流が、ワンカバンバ川流域の神殿社会の戦略として最も重要な要素となったのである。

このように、流域外に存在した他の神殿社会との交流は、神殿を中心に展開する新たな技術や情報、イデオロギーと深く関連することから、神殿をめぐる活動や流域社会の変化に際して、とりわけ重要な意味を有していた。そのため、地域間ルートの存在が、神殿の立地や建設・維持活動の選択・決定・戦略を左右するようになり、神殿と神殿を支える社会が大規模化していく要因ともなった。つまり、大規模神殿、とくにインガタンボを支え

た人々が、建設当初から地域間ルートとの交点となるような立地を選択し、長期間にわたって継続的に活動を行った結果、インガタンボほどの神殿よりも大規模化したのである。このことから、流域社会の展開においては、所与の環境を考慮したうえで、人々が自らにとって最適な立地を選択し、とりまく環境を上手く活用しながら神殿やセトルメントを構築していくことこそが、重要であったと考えられる。そして、こうして生じた大規模神殿の優位性は、その後の社会展開において人々の活動や戦略に影響をおよぼした。言い換えれば、地域間ルートとそれとの関係のなかで築かれた流域内のセトルメント自体が、特定の神殿に人々の活動が集中するような背景ともなったのである。また、神殿における活動を活発に行うためには、地域間交流をさらに活性化していく必要があるため、人々の戦略として地域間交流を重視する状況が生み出されていった。その結果、神殿を支える人々、とくにリーダーの活動や戦略のなかで、地域間交流の重要性が次第に増すことで、大規模神殿にとって、さらに優位な状況が築かれるというサイクルが生じたのである。

これまで述べてきたように、ワンカバンバ川流域社会の変化に際して、地域間交流が重要な役割を果たしたことは明らかである。先述したように、形成期後期の地域間交流の活性化とそれと関わる社会変化に関しては、クントゥル・ワシヤパコパンパといったペルー北部の大神殿においても指摘される（加藤 2007; 関 2010）。しかし、そうした大神殿における動きに先行して、神殿やセトルメントを構築していく時点から地域間交流を極めて重視し、かつ社会変化における地域間交流の重要性がなによりも高い点に、ワンカバンバ川流域社会の独自性がある。

以上のように、ワンカバンバ川流域のセトルメントは、人間による環境への単なる適応ではなく、人間と環境との相互作用のなかで構築されてきた。この意味において、セトルメントには、様々な形で人間の活動や戦略が介在している。そして、セトルメント・パターンの通時的変化、とくに神殿の建設・維持活動とは、とりまく環境を人間が意味づけし、自らの戦略に適した景観をつくりあげていく行為であり、その過程といえる。つまり、人々がつくりあげた神殿、ルート、セトルメントは、神殿を支える集団、とくにリーダーが流域内部社会や外部社会との関係のなかで、自らに有益な社会を構築しようとした活動と戦略の結果である。そして、こうした景観は、一度構築されてしまうと、それを主体的に築いた人々に有利な状況をもたらすために、人々の活動や戦略そのものを規定し、影響をおよぼす存在ともなるのである。

本稿では、ワンカバンバ川流域という特定地域において、地域間交流を重視しながら、神殿をめぐる人々の活動と戦略について論じ、神殿を中心とした社会の展開の一つのあり方を示してきた。しかし、ワンカバンバ川流域やその周辺地域の調査は極めて乏しく、議論を発展させていくにはデータの充実が不可欠である。また、議論を精緻化するために、流域社会でみられた同様の現象が、同時期に交流を有した周辺地域において認められるのか、あるいは景観をつくりあげていくなかで重視される他の活動や戦略が存在するののかという点を追求する必要がある。もちろん、景観をつくりあげていくなかで、自然環境や周辺地域社会の影響などによって、流域社会の人々が意図しなかった結果が生じた可能性もあり、それを理解していくには、様々な自然的背景や社会的背景の考察が不可欠である。

今後は、本稿でとりあげた遺跡立地や遺跡分布だけでなく、建築配置や眺望なども議論の対象としながら、景観をめぐる様々な課題にも取り組んでいきたいと考えている。

謝 辞

本稿の執筆にあたって、日本のアンデス調査団の先生方には、多くのご教示ならびにご助力を承った。ここに記して深謝の意を表します。また、国立民族学博物館の市川彰氏には、有益な助言をいただき、感謝いたします。なお、本研究は、科学研究費補助金と特別研究員奨励費の支援を受けて行った成果の一部を含むものです。

参考文献

Albarracin-Jordan, Juan

1996 “Tiwanaku Settlement System: The Integration of Nested Hierarchies in the Lower Tiwanaku Valley,” *Latin American Antiquity* 7: 183-210.

Anschuetz, Kurt F., Richard H. Wilshusen and Cherie L. Sheick

2001 “An Archaeology of Landscapes: Perspectives and Directions,” *Journal of Archaeological Research* 9-2: 157-211.

Ashmore, Wendy and A. Bernard Knapp (eds.)

1999 *Archaeologies of Landscape: Contemporary Perspectives*, Malden: Blackwell.

Balkansky, Andrew K.

2006 “Surveys and Mesoamerican Archaeology: The emerging macroregional paradigm,” *Journal of Archaeological Research* 14: 53-95.

Bandy, Matthew S.

2005 “Trade and Social Power in the Southern Titicaca Basin Formative,” In Vaughn, K. J., D. Ogburn, and C. A. Conlee (eds.), *Foundations of Power in the Prehispanic Andes*, Archaeological Papers of the American Anthropological Association 14, pp. 91-111, Arlington: American Anthropological Association.

Billman, R. Brian

1996 *The Evolution of Prehistoric Political Organizations in the Moche Valley, Peru*, Ph.D. Dissertation, Santa Barbara: University of California.

1999 “Settlement Pattern Research in the Americas: Past, Present, and Future,” In Billman, R. B. and G. M. Feinman (eds.), *Settlement Pattern Studies in the Americas*, pp.1-8, Washington and London: Smithsonian Institution Press.

Burger, Richard L.

1984 “Archaeological Areas and Prehistoric Frontiers: The Case of Formative Peru and Ecuador,” In Browman, D. L., R. L. Burger and M. A. Rivera (eds.), *Social and Economics Organization in the Prehispanic Andes*, pp.33-71, BAR

International Series 194, Oxford : British Archaeological Reports.

1985 "Concluding Remarks: Early Peruvian Civilization and Its Relation to the "Chavin Horizon"," In Donnan, C. B. (ed.), *Early Ceremonial Architecture in the Andes*, pp. 269-289, Washington D.C.: Dumberton Oaks Research Library and Collection.

1992 *Chavin and the Origins of Andean Civilization*, London: Thames and Hudson.

2009 "Los Fundamentos Social de la Arquitectura Monumental del Periodo Inicial en el Valle de Lurín," In Burger, R. L. and K., Makowski (eds.), *Arqueología del Periodo Formativo en la Cuenca Baja de Lurín*, Vol. 1, pp. 17-36, Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú, Fond Editorial.

Burger, Richard L. and Lucy Salazar-Burger

1991 "The Second Season of Investigations at the Initial Period Center of Cardal Lurin Valley," *Journal of Field Archaeology* 18: 257-296.

Contreras, Daniel A.

2007 *Socio Political and Geomorphologic Dynamics at Chavin de Huantar, Peru*, Ph.D. Dissertation, Department of Anthropological Sciences, Stanford University.

2010 "Landscape and Environment: Insights from the Prehispanic Central Andes," *Journal of Archaeological Research* 18: 241-288.

De Marrais, Elizabeth, Luis Jailme Castillo and Timothy Earle

1996 "Ideology, Materialization, and Power Strategies," *Current Anthropology* 37-1: 15-31.

Earle, Timothy

1997 *How Chiefs Come to Power; The Political Economy in Prehistory*, Stanford: Stanford University Press.

Espinosa, Reyes

2002 *La Gran Ruta Inca, El Cápaq Ñan*, Lima: Petróleos del Perú.

Guffroy, Jean

1989 "Un Centro Ceremonial Formativo en el Alto Piura," *Bulletin de l'Institut Français d'Etudes Andines* 18-2: 161-207.

Haas, Jonathan

1987 "Introduction," In Haas, J., S. Pozorski and T. Pozorski (eds.), *The Origins and Development of the Andean State*, pp. 1-4. Cambridge: Cambridge University Press.

Hodder, Ian

1982 *Symbols in Action: Ethnoarchaeological Studies of Material Culture*, Cambridge: Cambridge University Press.

Houquenghem, Anne-Marie

- 1991 “Frontera entre “Áreas Culturales” Nor y Centroandinas en los Valles y la Costa del Extremo Norte Peruano,” *Bulletin de l’Institut Français d’Etudes Andines* 20-2: 309-348.
- Ikehara, Hugo and Koichiro, Shibata
- 2005 “Festines e Integración Social en el Periodo Formaivo: Nuevas Evidencias de Cerro Blanco, Valle bajo de Nepeña,” *Boletín de Arqueología PUCP* 9: 123-160.
- Izumi, Seiichi and Terada, Kazuo
- 1972 *Andes 4: Excavations at Kotosh, Peru, 1963 and 1966*, Tokyo: University of Tokyo Press.
- 加藤 泰建
- 1993 「アンデス形成期の祭祀建築」『民族芸術』9: 37-48。
- 2010 「大神殿の出現と変容するアンデス社会」、大貫良夫・加藤泰建・関雄二編『古代アンデス 神殿から始まる文明』、pp. 105-152、朝日新聞出版。
- 加藤 泰建・井口 欣也
- 1998 「コンドルの館」、加藤泰建・関雄二編『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』、pp. 163-224、角川書店。
- 加藤 泰建・関 雄二 (編)
- 1998 『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』、角川書店。
- Kaulicke, Peter
- 1975 *Pandanche: Un Caso del Formativo en los Andes de Cajamarca*. Lima: Seminario de Historia Rural Andina.
- 河合 洋尚
- 2013 『景観人類学の課題—中国広州における都市景観の再生をめぐって』、風響社。
- Kowalewski, Stephen A.
- 2008 “Regional Settlement Pattern Studies,” *Journal of Archaeological Research* 16: 225-285.
- McIntosh, Susan K.
- 1999 “Floodplains and the Development of Complex Society: Comparative Perspectives from the West African Semi-arid Tropics,” In Bacus, E. A. and L. J. Lucero (eds.), *Complex Polities in the Ancient Tropical World*, Archeological Papers 9, pp. 151–166, Arlington: American Anthropological Association.
- Malaver Pizarro, Manuel Enrique
- 2001 *Arquitectura Monumental Formativa del Sitio Inगतambo, Valle del Río Huancabamba, Provincia de Jaén*, Proyecto de Investigación para Optar el Título de Licenciado en Arqueología, Universidad Nacional de Trujillo.
- 松本 直子・中園 聡・時津 裕子
- 2003 『認知考古学とは何か』、青木書店。
- Murra, John V.

- 1985 “El Archipiélago Vertical, Revisited,” In Masuda, S., I. Shimada and C. Morris (eds.), *Andean Ecology and Civilization*, pp. 103-140, Tokyo: University of Tokyo Press.

Moore, Jerry D.

- 1996 *Architecture and Power in the Ancient Andes: The Archaeology of Public Buildings*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 2005 *Cultural Landscape in the Ancient Andes: Archaeologies of Place*, Gainesville: University Press of Florida.

大貫 良夫

- 1989 「ペルー北高地カハマルカ盆地の形成期文化」『東京大学教養学部人文科学科紀要・文化人類学研究報告』5: 145-255。

大貫 良夫・加藤 泰建・関 雄二 (編)

- 2010 『古代アンデス 神殿から始まる文明』、朝日新聞出版。

Onuki, Yoshio (ed.)

- 1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco, Dos sitios del Formativo en el Norte del Perú*, Tokio: Hokusen-sha.

Pozorski, Shelia and Thomas Pozorski

- 1987 *Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*, Iowa: University of Iowa Press.

Pozorski, Thomas G.

- 1980 “The Early Horizon Site of Huaca de los Reyes: Societal Implications,” *American Antiquity* 45 (1): 100-110.

Ravines, Rogger

- 1983 *Inventario de Monumentos Arqueológicas del Perú, Zona Norte (Primera Aproximacion)*, Lima: Instituto Nacional de Cultura.

関 雄二

- 2006 『古代アンデス権力の考古学』、京都大学学術出版会。
- 2010 「形成期社会における権力の生成」、大貫良夫・加藤泰建・関雄二編『古代アンデス 神殿から始まる文明』、pp. 153-202、朝日新聞出版。

関 雄二・坂井 正人

- 1998 「聖なる丘」、加藤泰建・関雄二編『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』、pp. 95-162、角川書店。

Shady, Ruth Solís

- 1973 *La Arqueología de la Cuenca Inferior del Utcubamba*, Ph.D. Dissertation, Universidad Nacional Mayor de San Marcos.
- 1974 “Investigaciones Arqueológicas en la Cuenca del Utcubamba, Amazonas,” *Artículo Reproducido de Las Actas del XLI Congreso Internacional de Americanistas*, México, Vol 3: 579-589.

Shanks, Michael and Christopher, Tilley

1987 *Social Theory and Archaeology*, Cambridge: Polity Press.

Shimada Izumi, Carlos G Elera and Melody J. Shimada

1982 “Excavaciones Efectuadas en el Centro Ceremonial de Huaca Lucia-Cholope del Horizonte Temprano, Batan Grande, Costa de Perú: 1979-81,” *Arqueológicas* 19: 109-210.

Staller, John Edward (ed.)

2008 *Pre-Columbian Landscapes of Creation and Origin*, New York: Springer.

Steward, Julian H. and Louis C. Faron

1959 *Native peoples of South America*, New York: McGraw-Hill.

Tellenbach, Micael

1986 *Las Excavaciones en el Asentamiento Formativo de Montegrando, Valle de Jequetepeque en el Norte del Perú*, *Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie* 39, München: Verlag C.H. Beck.

Tilley, Christopher

1991 *A Phenomenology of Landscape: Place, Paths, and Monuments*, Oxford: Berg Publishers.

1996 “The Powers of Rocks: Topography and Monument Construction on Bodmin Moor,” *World Archaeology* 28-2: 161-176.

Topic, John R. and Theresa Lange Topic

1983 “Coast-Highland Relations in Northern Peru: Some Observations on Routes, Networks, and Scales of Interaction,” In Leventhal, R. M. and A. L. Kolata (eds.), *Civilization in the Ancient Americas, Essays in Honor of Gordon R. Willey*, pp.237-259, Albuquerque and Cambridge: University of New Mexico Press and Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.

Trigger, Bruce G.

1990 “Monumental Architecture: A Thermodynamic Explanation of Symbolic Behaviour,” *World Archaeology* 22-2: 119-132.

Trombold, Charles

1990 “An Introduction to the Study of Ancient New World Road Networks,” In Trombold, C.D. (ed.), *Ancient Road Networks and Settlement Hierarchies in the New World*, pp. 1-9, Cambridge: Cambridge University Press.

鶴見 英成

2008a 『ペルー北部、ヘケテペケ川中流域アマカス平原における先史アンデス文明形成期の社会過程』、東京大学大学院提出博士論文。

2008b 「ペルー北部、諸河谷中流域の調査：形成期地域間ルート研究事始」『古代アメリカ』第11号：61-73。

Vega-Centeno, Rafael

- 2005 *Ritual and Architecture in a Context of Emergent Complexity: A Perspective from Cerro Lampay, a Late Archaic Site in the Central Andes*, Ph.D. Dissertation, University of Arizona.

Willey, Gordon

- 1953 *Prehistoric Settlement Patterns in the Viru Valley, Peru*, Washington D.C.: Smithsonian Institution Bureau of American Ethnology.

Wilson, David J.

- 1988 *Prehispanic Settlement Patterns in the Lower Santa Valley, Peru: A Regional Perspective on the Origins and Development of Complex North-Coast Society*, Smithsonian Series in Archaeological Inquiry, Washington D.C.: Smithsonian Institute.

Yamamoto, Atsushi

- 2007 “El Reconocimiento del Valle de Huancabamba, Jaén, Cajamarca, Perú,”

Arkeos 2-2: 1-16.

- 2013 “Las Rutas Interregionales en el Periodo Formativo para el Norte del Perú y el Sur de Ecuador: Una Perspectiva desde el Sitio Inगतambo, Valle de Huancabamba,” *Arqueología y Sociedad* 25: 9-34.

山本 睦

- 2012 『先史アンデス形成期の社会動態—ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から—』、総合研究大学院大学文化科学研究科博士論文。

Yoffee, Norman

- 1993 “Too Many Chiefs? (or Safe Texts for the ‘90s),” In Yoffee, N. and A. Sherratt, (eds.), *Archaeological Theory: Who Sets the Agenda?*, pp. 60-78, Cambridge: Cambridge University Press.

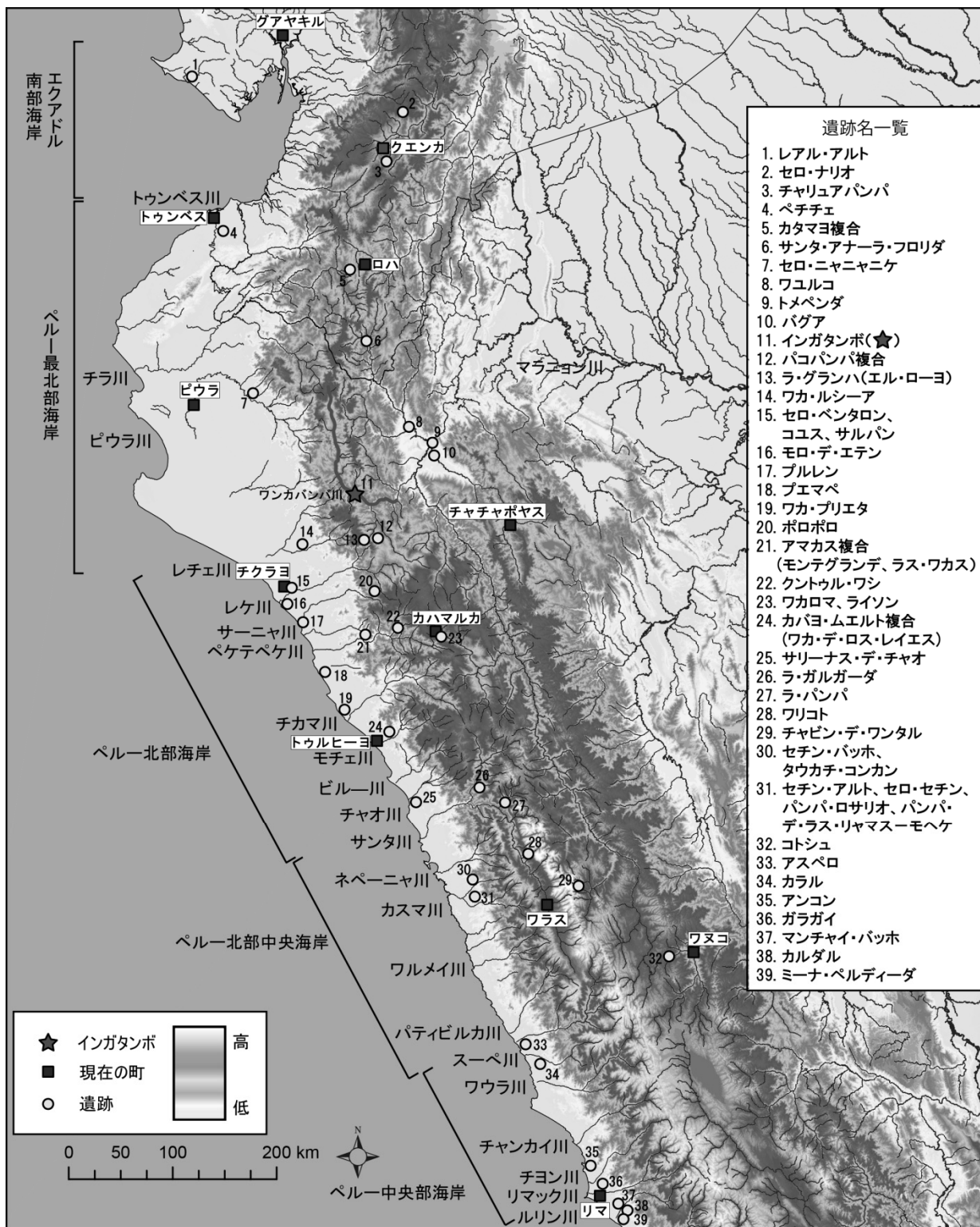
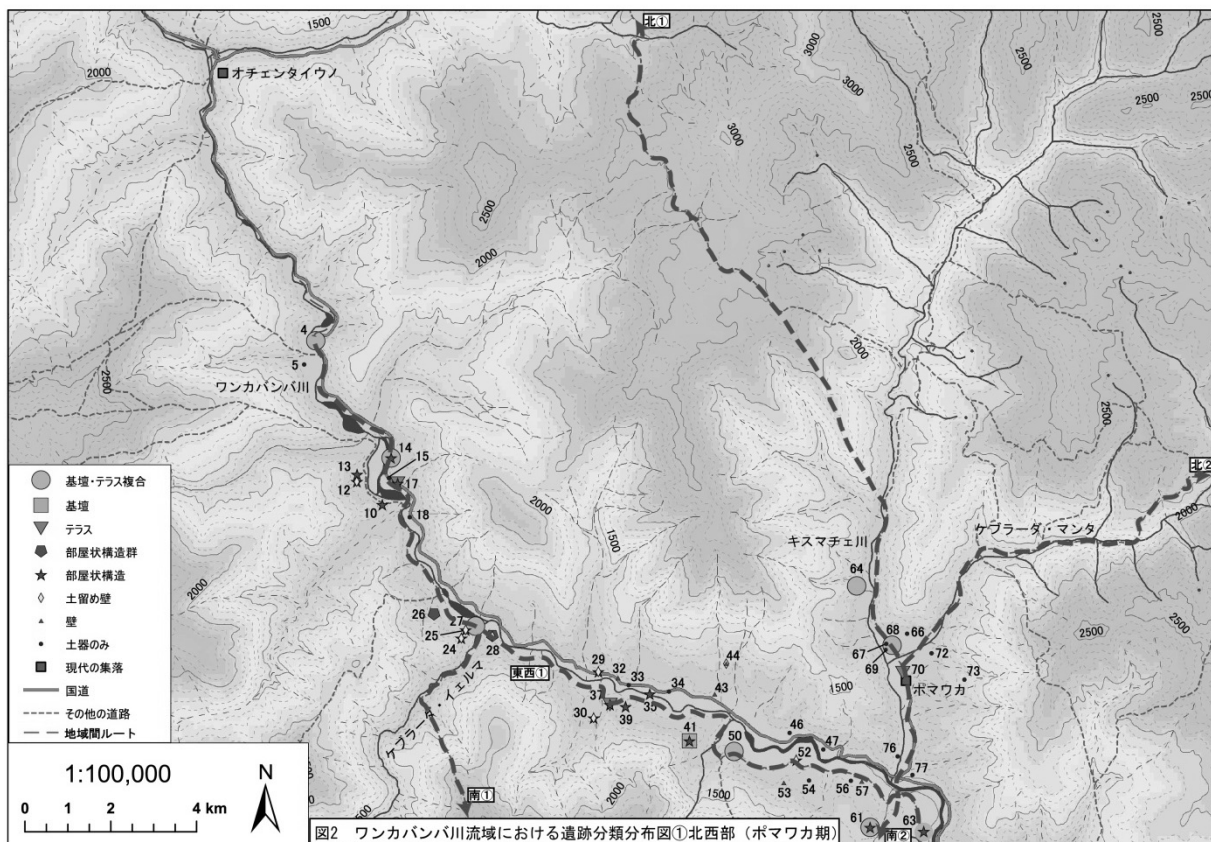
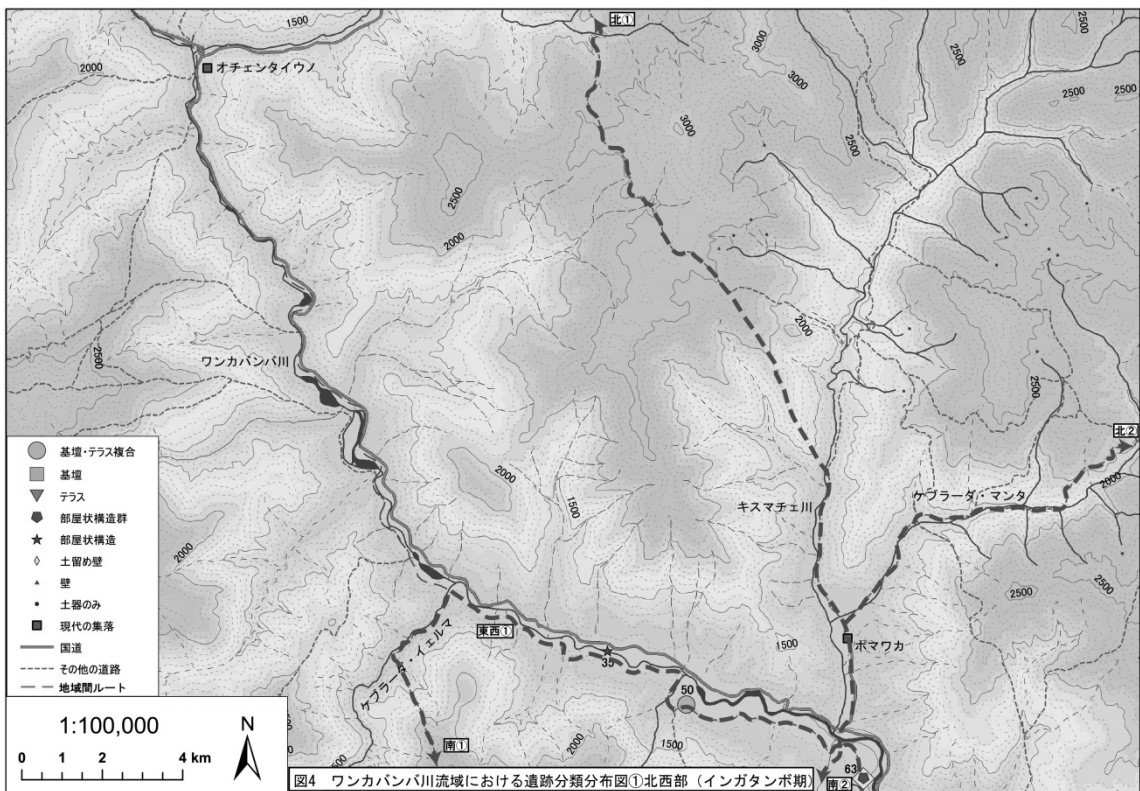
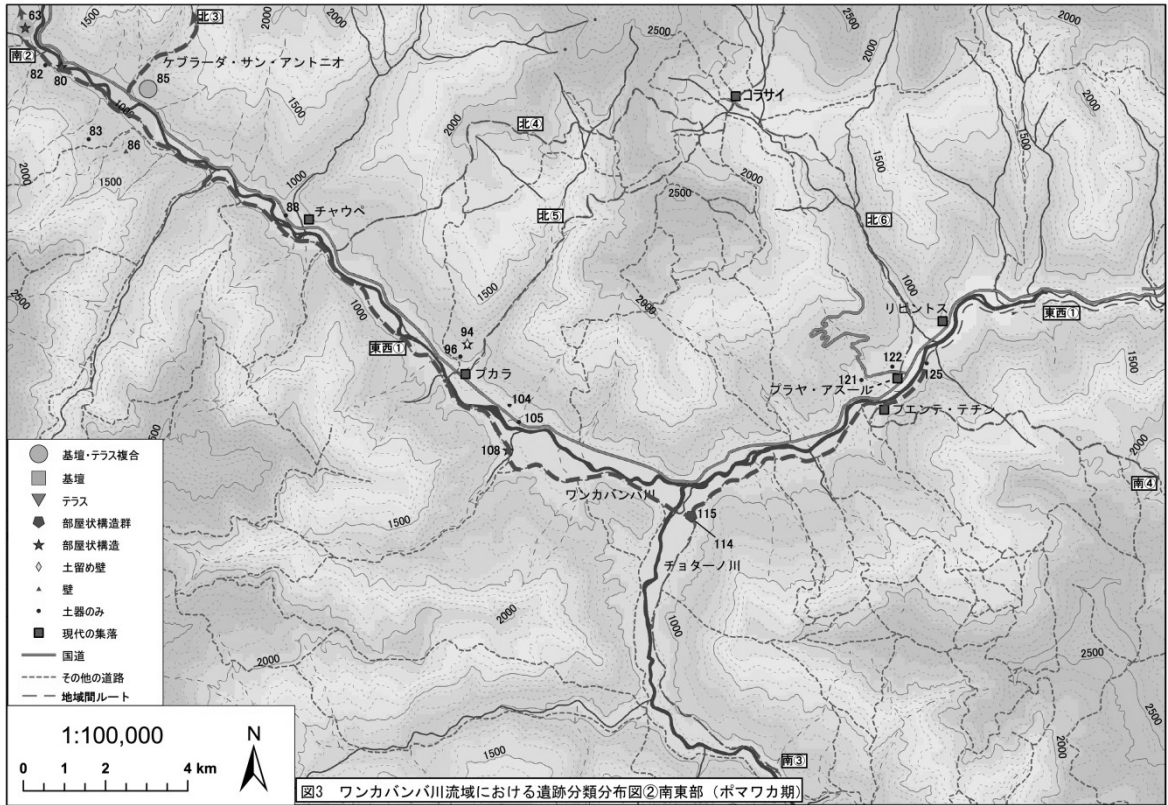


図1 ワンカパンバ川流域およびインガタンボ遺跡と関連遺跡

0	エクアドル	ペルー									
	カタマヨ複合	セロ・ニヤニヤケ	ワンカバンバ川流域 インガタンボ	ハエン	バグア	パコバンバ ラ・グランハ	ワカロマ ライソ	クントウル・ウシ	セロ・ペンタロン コユー、サルバン	モロ・デ・エテン ワカルシーア	アマカス複合
B.C.250		チャピーカ			エル・サラード		ライソ	ソテーラ			
	カタマヨD	ラ・エンカンターダ				エル・ローヨ	EL	コバ			
B.C.550					ラ・ベカ					モロ・デ・エテン	
	カタマヨC	パネシージョ	インガタンボ	トメベンダ	バグアII	パコバンバII	後期ワカロマ	クントウル・ウシ	コユー		レチューサス
B.C.800									イドロ		
B.C.1000		ニヤニヤケ	ポマワカ		バグアII	パコバンバI	前期ワカロマ		サルバン	ワカルシーア	テンブラデーラ
B.C.1200	カタマヨB										
B.C.1500					モレリージャ	バンダンチェ					アマカス
B.C.2000	カタマヨA		ワンカバンバ						セロ・ペンタロン		
B.C.2500											

表1 ワンカバンバ川流域およびインガタンボ遺跡と関連遺跡の編年





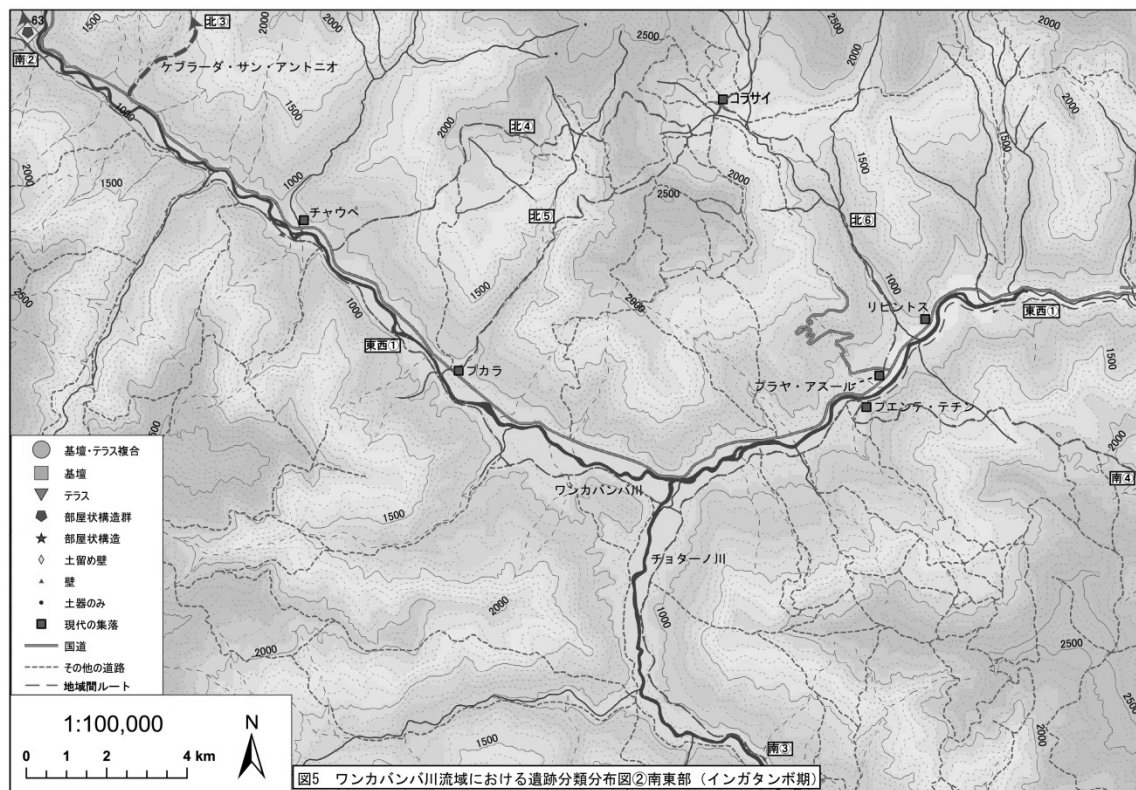


表2 ワンカバンバ川流域における形成期の諸遺跡と建築の形態的分類、および土器分布範囲面積

遺跡番号	遺跡名	時期		遺跡の形態とカテゴリー								土器分布範囲面積 (m ²)		
		ポマワカ期	インガタンボ期	1	2	3	4	5	6	7	8			
				基壇・広場・ テラス複合	テラス・ 基壇・ 複合	基壇	テラス	部屋状 構造物群	部屋状 構造物	土留め壁	壁		土器のみ	
4	グアヤボ	○			○	○	○				○	○		1332.8
5	サポタル	○											○	600
10	セロ・リモン 4	○								○		○		45.1
12	リモン 2	○								○	○	○		286.9
13	リモン 3	○								○		○		739.8
14	リモン・セコ 1	○			○	○	○			○		○		5626.5
15	リモン・セコ 2	○											○	596.3
17	ペドレガル 1	○					○			○		○		803.8
18	ペドレガル 2	○											○	591.7
24	イェルマ 3	○								○	○	○		147.2
25	イェルマ 4	○								○	○	○		610.9
26	イェルマ 5	○						○		○		○		1434.7
27	イェルマ 6	○			○	○	○			○	○	○		13526
28	モジェ	○						○		○	○	○		1971.6
29	アラビスカ 1	○								○	○	○		973.6
30	アラビスカ 2	○								○	○	○		343.6
32	エル・アレナル 1	○										○		839.2
33	エル・アレナル 2	○											○	415.4
34	エル・アレナル 3	○											○	282.5
35	エル・アレナル 4	○	●							○	●	○	●	337.7
37	セロ・ラ・パス	○					○			○		○		1797.5
39	サン・ホセ・デ・オブレロ 2	○								○		○		2584.4
41	ピエドラ・バラダ 1	○				○				○		○		1488.4
43	パタコン 1	○										○		776
44	パタコン 2	○									○	○		791
46	パタコン 4	○											○	723.8
47	パタコン 5	○											○	1391.7
50	カニヤリアッコ 3	○	●		○	●	○	●	○	●		○	●	5704.4
52	サポテパンパ 1	○								○	○	○		1861
53	サポテパンパ 2	○										○		337.7
54	サポテパンパ 3	○											○	387.9
56	ナランホ 2	○											○	407.7
57	ナランホ 3	○										○		1899.6
61	エル・レホ	○			○	○	○			○	○	○		2249.3
62	リモンパンパ	○									○	○		315.6
63	インガタンボ	○	●	●	○	●	○	●	○	●	○	●	○	290433.8
64	ランバラ	○			○	○	○				○	○		2379.8
66	ロマ・デ・サポテパンパ	○											○	4180.5
67	ワカ・デ・サポテパンパ 1	○											○	433.5
68	ワカ・デ・サポテパンパ 2	○			○	○	○					○		2600.3
69	ワカ・デ・サポテパンパ 3	○											○	601.3
70	ワカ・マヨール	○					○							1563.3
72	アルガロポ 1	○											○	589.7
73	アルガロポ 2	○											○	183.3
76	カサ・ケマータ	○											○	178.1
77	ラス・フンタス	○											○	788.5
80	ピエドラ・グランデ	○								○		○		352
82	モンテ・グランデ 2	○											○	107.4
83	ワランゴ・パンパ 1	○											○	337
85	サン・アントニオ	○			○	○	○				○	○		1913.5
86	セロ・サン・クリストバル	○										○		228.5
88	チャウベ 1	○											○	162.7
94	アルカパロッサ 1	○								○	○	○		3997.4
96	アルカパロッサ 3	○											○	2205
104	ミラドール	○											○	228
105	サン・ホセ 1	○											○	176.4
108	チンゲル	○								○		○		874.8
114	ラ・ワカ 2	○										○		3822
115	ラ・ワカ 3	○							○	○		○		2448
121	ラス・バルサス	○											○	1183.1
122	ブラヤ・アスール 1	○											○	360.7
125	マタラ 1	○											○	332.9

○はポマワカ期 ●はインガタンボ期

Activities and Strategies for Ceremonial Architecture in the Andean Formative: Settlement Patterns and Inter-regional Interactions in the Huancabamba Valley, Northern Peru

Atsushi Yamamoto

This paper aims to discuss the activities and strategies related to the construction and maintenance of ceremonial architecture of the Huancabamba valley inhabitants in northern Peru, on the basis of the valley's settlement patterns and inter-regional interactions.

During the Pomahuaca phase (1200-800 B.C.); the Huancabamba valley presents an increase of archaeological sites –including ceremonial sites– compared to previous phases due to a sudden social change. Cultivable land and water supply availability were indeed an important need for deciding where to construct a settlement. However within the basin region, the inter-regional exchange routes going in and out of the valley had critical importance. Thus, a suitable location near these routes was decisive at the time of settlement construction. The period when the inter-regional exchange routes became more significant –i.e. when the inter-regional exchange were more active in northern Peru– was consistent with the time when the ceremonial centers increase significantly in size and complexity. Under such circumstances, Inгатambo, a ceremonial architecture located in a strategic point of inter-regional routes from every direction leading into the valley, became the core of social integration of the Huancabamba basin.

From this point of view, the central role of the ceremonial center in valley can be understood as the result of the relationship between the ceremonial architecture and the interchange routes; not only at the time of construction, but over time. Hence, the engaging relationship between the ceremonial centers and the regional routes stimulated dramatic changes in the ceremonial architecture itself, as well as the societies that supported them.

Therefore, the presence of inter-regional exchange routes influenced the activities and strategies of people in aspects like selection of location, construction or maintenance of ceremonial architecture. Those receiving actors, especially leaders of the society, developed the inter-regional interaction actively to obtain materials and information from other regions, in order to achieve differentiation within their society and to build up relationships with other developing ceremonial centers in the surrounding areas.

To summarize, we consider that the ceremonial architecture, routes, and settlements, what were built by peoples, are consequence of people's activities and

strategies. And at once, it became a mechanism or device to provide and have an influence on people's activities and strategies.

Keywords

Andes, Ceremonial Architecture, Settlement patterns, Inter-regional routes, Inter-regional Interactions